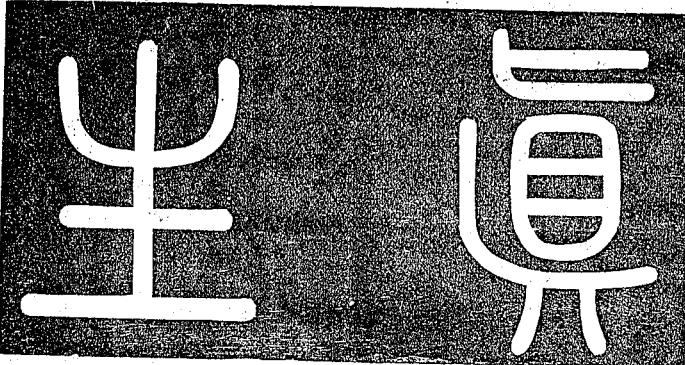


(大正十四年八月十三日)
第三種郵便物認可

昭和三年十二月廿七日印刷納本
昭和四年一月十二日發行 (毎月一回十二日發行) 第八卷 第一號



第一卷 八月號

来る年も来る年もいつも同じとばかり思つて居つた私は近頃になつて、夫は決してさうではなかつたと云ふことを今更のやうに知りました。年々歳々花と同じじく、年々歳々人と同じじからずとは古人の歌もありますが、その句を知らない私では無つたのに、何故に今までもそれを氣附づかずゐたでせう。

乍然それは暫くそれとして、静に人生の行路を考へれば實に此の世は嬉しくも亦樂しみの世界である。そこまでも研究すれば研究するほど此の世は實に面白く又樂しみの世界である。

見よ、限りなき宇宙の宏大きさ、時間の上にも限りなく、空間の上にも限りない。而も宇宙は一切を包括して一切と共に活きてゐる。而も宇宙と萬法とが別でない。

宇宙の生命と私共の生命と、其の源は一である。宇宙の生命を外にして私共の生命は他にない。宇宙と私は本來不二にして一である。如來と衆生は別でない。如來の生命そのまゝが即ち私の生命である。而も天地は動いてゐる。月日も星辰も山川も草木も一切のものは皆動いてゐる。無限の力と法則と、研究すれば極もない。そこには親あり子供あり、夫婦兄弟の生活もある。或は敵あり味方あり、或は喜怒あり、哀樂もある。

めぐりにめぐるは年ばかりではないけれど、永遠より永遠に流れ行く人生の行路を見ればそこには望みが輝いてゐる。樂い所には望みが輝き淋しい所には救が輝く。

日に新に日々に新たな眞人の生活よ、それはまた私共の理想生活である。所謂眞生の生活はまたこれ新生の生活でないか。

心して今年も亦眞剣に生きませう。(念)

目 次

當今の世相

(連如上人白骨の
お文をもじりて)

神谷善之進

新舊の思想とその生活

土屋觀道

信仰の神秘性

中村辨康

心の扉を開け

中野善美

宗教の体験と模倣

土屋觀道

吾朋便り

- 働け、働くところに行詰りはない。
- 私達には無限に動いてゆける力がある。無限に切り開いて行ける力が籠つてゐます。それが十分に發して居らぬ時に私達が動つてゐるのです。それで伸びぬ行詰つてゐるのです。つまり行詰りは自分が造つてゐるのです、行詰りを造り與へるものは何物もない、行詰りを造るモノがあつても私はそれを突破して進んで行ける。そういうふれ力、發展性が私には恵まれてゐます。
- 此の力が如來さまであります、私の「生命」が私の命であつて「如來さま」であります、斯ういふ生きくした「生きる」中心が私の裡、深くに根ざしてゐて、私を生かし、活かして行つて下さいます。だから其の發展性は「私」でなくて「如來さま」だと云へます。而し其如來さまは今云つた通り私を離れたものでないから「私そのモノ」とも云へます。だから助つて切り離せぬ二つであつて一つであります。古聖が「本來の面目」など、彼仰つたのは斯ういふ意味でないかと思ひます。
- だから此の「自己」が動き出して来る時に、自己は單なる自己ではなくて無限に伸びてゆきます、擴がつて行きます。無限に太つて丈夫になります。いくらでも仕事がやれるやうになります。所謂「創造」をしてゆく」と云つていゝか、無限に仕事が出来て、面白くやつてゆきます。而かもそれが正しく、善くせられて行きます。善い悪いことは客觀的に決められるものでなく、やつてゐる自身が、これではいかぬ、もつと良くして行かなならぬと反省して、勤めて行つてゐるもののが最も善いもの、正しいものであると思ひます。ですから外見にはどんなつまらぬものでも、又どんな悪い主義、行動でもその内に此精神が動いてゐるのなら「生きてゐる」もので、皆良いものだと信じます。(題字)

當今の世相

(連如上人白骨のお文をもじりて

神谷善之進

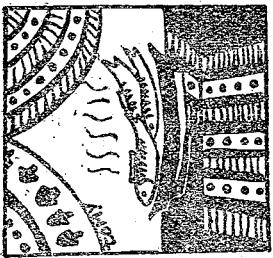
夫れ當今の不眞面目なる世相をつらゝ觀するに、凡そ上流の智識階級を初めとし無智文盲のしもゝに至るまで金錢を得るを以て唯一の幸福なりと思ふの一点なり。

されば何事につけても金、金、金、と思ふばかりにして浮身をやつす人多し。故を以て勢ひ知らず識らず人道佛道を無視して罪惡を重ね自ら苦しみ通して一生は過ぎ易し。然りご雖も今に至りて誰か百萬金はおろか只の百圓も彼の世に持ち行きたる人あるを聞かず。

斯の如き事實なることは元より知ると雖も我も改めず人も改めず今日とも知らず明日とも知らずつらうかく月日はたうちて一生は過ぎ易し。

されば日々の新聞紙上にあらはるゝ生臭き三面記事を初め、こゝには收斂事件となり彼處には選舉違反となりて醜惡なる事實の罪跡續々と顯る。されば朝には代議士となりて天下の選長を以て自ら任じ肩にて風を切つて通りし人も夕には刑務所のお客となりて臭い飯を喰ふばかりなり。既に一日其の真相の発表を見るに至れば凡ての信用はたちまちにして地に墮ち、世間一般よりつまはじきされ見返る人とはなし、斯の如くして紳士の体面を失ひぬる時は六親眷屬あつまりて嘆き悲しましも更にその甲斐あるべからず。さてしもあるべきことならねばとて家をたゞんで他國へ走つて移住すればあとには口よからぬ噂のみぞのこれり、おはれといふもなかく思なり。

されば人間の淺はかなる利慾の馬鹿々々しきことは賢愚老少を問はざらぬのなれば、誰の人もはやく人世の眞意義とは如何なるものかと心にかけて眞理の事實を深く研究して、悔いなき眞の幸福なる人世をおくるべきものなり。あなかしこく。



新舊の思想とその生活

土　　屋　　觀　　道

一、新しい頭と古い頭

新しい頭の持主は常に新しい研究を好み、常に新しい學説を求めては又新しい生活を營むが、古い頭の持主は常に新しい研究を好まず、常に古い昔の生活を好んで、自ら小成に安んずる。

乍然そのよつて来る所を尋ねれば各相當の理由もある。而も前者に青年が多くして、後者に老人が多いのも亦一つの面白い現象である。

私はその理由を人類の生理作用と社會生活の關係ではないかと思ふ。今その生理作用と云ふのは恰も一本の草木のやうに青年の頭は草葉の春の芽ばへの如く、之から大いに延びんとする生長の力に充ちて居り、所謂老人の生活は之から將に枯れんとする秋草の力なきがやうなものではないか。

從て青年の前途は自分が持つてゐる今の知識や経験ではあきらまらず、更に之から一層延びんとする新しき研究と學識とを求め、古い頭の老人には之から靜に安定を求めて、昔の知識と経験の中に安住しやうとする。從て前者に常に活氣があり、進歩があり、發展があり、そこに積極的活動があり、後者に元氣がなく、進歩がなく、力がなくして保守的であらうとするのも無理がない。

二、思想と生活

乍然それにもまして、新舊思想の争は主として社會組織の變革から來るのではなからうか。殊に今日のやうな社會組織の急激な變換期に於て、其の傾向が一層甚しいやうである。

即ち從來の社會制度に於て生活し易い人々はここまでも舊來の社會制度と思想生活を好むやうになり、之に反して、さうした古き生活に自らの束縛と不自由を感じる人々は之等の古き生活を厭して、更に新なる自由の生活を營むべく、之に適した思想と生活を求むるものも亦當然のことである。從て、そこに前者は古きを愛し、後者は新しきを求むる道理がある。従つてそこには年齢の相違や男女の區別と云ふことよりも、主とし生活關係と云ふものが本となる。

而も此の生活關係の相違が各自の生活の安定を求めて、遂には二者の衝突となり、争いとなり、闘いとなつて今日のやうな資本家と労働者、地主と小作人、貴族と平民、治者と被治者との争いとなつた。世には是を有產階級と無產階級との階級鬭争と云ひ、或は特權階級と平民階級との戦いとも言つてゐる。之を思想の上に眺むれば所謂新舊思想の衝突である。

乍然かゝる思想の争いは一体どこから起つて來るか、それは主として両者の生活組織の相違から起つて來る。即ち思想の衝突はその裏に所謂生活關係の利害の衝突があるからだ。

乍然この二つの争いは果して何れが正しいか、人類の正義と自由と博愛との上に何れを最も正しくするか、そこには重大なる私共の考察を要するものがある。而て世に危險思想と云ふものがあるならば人類の幸福を害し、社會の安寧を妨げる思想や生活を言はねばならない。然ば今日の所謂社會生活に於て、如何なる思想と生活とが果して生活の幸福と安寧とを書するであらうか。仕事も仕ないで遊んで食つたり、人の働いたものをたゞとりして生活する、さうした危險な思想と生活の人々はな

いか、さうした人々所謂今日の上流階級に多いではないか。乍然さうした思想や生活の持主に限つて反て自分の生活に都合の悪いと思ふものを危険視して、未だ一度も自分の思想と生活が社會に對して大きな危険そのものであることを反省するものゝないのはどうしたことだ。

二、宗教の今昔

而も此の誤りは今日の宗教の上にもあらはれておる。即ち古い宗教の人々がそれである。今日の人類がこの社會生活の上に一つの疲れと懨とを持つてゐることは事實である。乍然この疲れと懨みとが何によつて起り何に依て癒ゆるかを考察してそれを教ふのが宗教でないか。

然に今日の宗教は一体何をしてゐるであらうか。そこには深き反省を要するものがある。徒に昔のまゝの思想と形式で現代を教はうとすることはそれはあまり時代を解せぬやり方ではないか。

從來の宗教でも其の初めは決して今日のやうな宗教は無かつた。そこには常に躊躇つたる生命の輝きがあつて、常に當時の思想と生活とを指導して止まなかつた。而してそこに新に生くべき民衆の先駆者であつたことはもとよりである。從て當時の宗教が當時の思想と生活とに一致すべく現はれてゐたことはもとよりである。

乍然それだからと云つて、昔のまゝの思想と形式で今日の社會を教はうと云ふことはあまりである。昔と今とは其の時代が異ふ。従つて、昔のまゝの封建思想や貴族中心の思想や生活の形式では今日の社會は立ち行かぬ。そこには自らなる社會宗教の變革もあるべきではないか。

乍然今日の既成宗教にそれを望むのは無理かも知れぬ。是等の多くは主として、貴族時代や封建時代に發生して、それらの時代に適應すべくあまりに完成せられた爲めに、今や新しき時代を教ふべく變形するにはあまりに固化した形である。

乍然古い頭の持主が今尙此の世に存する限り、之等の古い宗教も亦幾分の働きはある。乍然それだからと云つて、それが果して民衆一般の上から、此の世に存在する價値があるかは問題であらう。従てまた、それが此の世に今後も永く存在するかは更に大きな疑問である。

四、生活と宗教

乍然、人類の生活が常に向上し發展して行く限り、其の宗教の形式と内容が之と一致すべく變化して行くことは當然であらう。從て從來の宗教も其の發生の當時に於てはもとより時代の生活に一致した。否それどころか、寧ろ之等の生活中心の指導であつた。従つて一宗の祖師たちは此の意味に於ての古き宗教の改革者でもあつた。而もそれが多くの民衆の味方であつたことは云ふまでもない。

之によつて之を見れば凡そ今後の宗教は此の新しき民衆を中心として、眞に生くべきの道を開宣して行くものでなくではならない。

乍然こゝに注意すべきは此の思想新舊の争いが何を中心として現はれてゐるかと云ふことである。そして、私の見るところではそれが主として、經濟中心の生活であつて、未だ人類の眞意義にまで深く目醒めてゐないことである。

從て、今後の私共の思想信仰は更に此の生活の上に一步を進めて、意義ある人生の何ものであるかを常に指示し、人類一般の生活と離れずして、之に即したる眞の向上と發展とを民衆の本心に訴へるものでなくてはならない。而もそこには全体が一つとなつて進み行く所謂全一の生活である。

而して、古來偉人の生活を見るに、彼等もやつぱり私共と同じ方向に進んでゐる。そこには常に人類の自覺を促し、社會の生活と相應して、常に人心の改造と其の生活の改善を旨とした。所謂公私一如の生活であり、自他一体の活動である。従つて、一切を一とし、一を一切として、日々に新に、日

々に新たなる向上の一途をたどつて止まなかつた。そこには新舊の思想も自ら統一せられ、二つの争いもいつかは止むで、自他不二の向上があるばかりである。(三九二六—三一一六再發三卷)

信 仰 の 神 秘 性

（未信並に既信の友へ）

中 村 雅 康

人間として生きて行く限りに於て、信仰なしには到底不安であり不幸であると云ふ事は、もう誰でも否定する事が出来ない迄に、社會の凡ての階級が熱心に正しき宗教を要求し初めて居る。

而して大體は從來の未來教に現はれて居る様な非現実的な神祕的なものを嫌つて、合理的な常識的なものを正しき者として眺め、而して更に修養の實踐躬行の勞苦を厭ふて、批判と思索との耳と頭とを以て信仰を確立しやうと企てる事も事實である。

だがかうした信仰の神祕性を否定し様とする傾向は、宗教本質の上から考へてよい事が悪い事が考へ様に依つては隨分六ヶ敷い問題にならうけれども、少くとも次の事は斷言し得ると思ふ。則ち

信仰が固定するものでなく徐々に進歩し若しくは退化する變易性を有する者であると認むる限りに於て、神祕性なき宗教は信仰の永續性を失くす者であると。

成る程、是れ迄神祕主義の濃厚なる宗教は、勢ひ其特質を發揮すべく超論理を強調して來た。けれども其の超論理は教の不合理を塗り隠す爲めだと誤解を受けつゝあるのである。

淨土宗真宗等の淨土門派の他力教もかくの如き誤解を招きつゝある。かの西方十萬億の佛土を超へて存在すると云ふ極樂の世界も、若し一つの神話を基礎として其處への往生を勧説するならば余りに非合理が見え透いて居る様に一

般から思はれて居る。

隨つて其の神話に基盤を置かないで、贋罪の教理、救濟の原理、往生の哲理が究明される時、超論理的な口吻が出るから、第三者者は一方に傳統無視の異端者視すると共に一方に欠陥嘲諷の窮屈を冷笑し去るのである。

だが夫は宗教の神祕性に對する理解がないからであつて一種の偏見に過ぎないものである。

現在の問題は、宗教眞理が合理的か否かに在るに非ずして、私達が考へて居たものよりも更に深遠なる合理があるか否かでなくてはならない。即ち思惟を超越せる眞理と而して其眞理に基く人生と社會との眞の平和はないかどうかと云ふ事に問題の中心点があらねばならぬ。

多くの學者達は昨日までの靜止的な對絶論、希望なき機制論、固定せる觀念論に倦んで、哲學の上に新鮮なる創造力をもたらした。而して眞理の神祕的本源に就ての信仰が復興しやうとして居るのである。オイケンやベルグソンやウイリアム、ゼームスや皆然りである。

一体神祕主義にも色々な形式があつて之を一把一からげに否定せんとするのは科學萬能主義の殘して行つた偏見に過ぎない。成る程、程度の低い迷信に近いものは大概濃厚なる神祕色を持つ。而して程度が高くなるに隨つて益々高遠な哲學を有しつゝ愈々神祕の色は薄くなつて行く様に見えはする。然しこう程度が高いからと云つて神祕色が薄くなるものではない。夫れは黒が漸に變化して行つたのに過ぎない。神祕色が違つた方向に變換されたのに過ぎない。其神祕性に就ては毫も増減はないのである。

アメリカの或る神祕學者は「神祕主義は靈的啓蒙主義だ」と云つて居るが、實に云ひ得たものだとほゝ笑はずには居られない。

常識的な私達は委曲を盡くした理論を聽き事を好むが、よし夫れが充分に納得されても單に概念として残される才であつて、力ある信仰となり兼ねる者である事を知らねばならぬ。強い信仰となるにはさうしても精神轉回の大原因をなす神祕的体験が必要である。即ち靈的啓蒙なしには其人の全人格を支配する強い信仰とはならない者である。神祕的体験と云つても幻覺的な神祕経験を喜ぶ、所謂驟驟主義を鼓吹しやうとして居るのでない。

又肉を無視して靈のみを尊重する心靈主義を詫かふとする者でもない。

唯多くの人々が心的修練を厭ふて單に耳や目に依つて信念の教養に努めやうとする誤りを訂したいのである。即ち書籍や講演に依つて信仰を確立しやうとする方法が決して適切方法としては正しき道でない事を知つて眞ひたいのである。

無論書物や講演が信仰の培養に無効だと云ふのではない。單に之では永遠の信仰となるには却つて難道である事を悟つて貰いたいのである。

如來の實在を信じ其絕對救濟を信する事は、單に推理的な言葉や文字では、よし夫れが納得されたとするも唯だ教説の原理、理佛實在の道理が肯定された丈に過ぎないのであつて、本當に如來の絕對救濟が味はれて居る譯ではない。言ひ換へて見ると夫れは單に智の満足があつたまで情意の絕對満足は有り得ないのである。

或は云ふかも知れない。「夫は自力教と他力教との相違で他力教にはこちらの心的修練はいらぬものである」と然し夫れは他力教の特質たる神祕性を無視したものである。誠に信仰の神祕を開く妙鍵は靈的啓蒙に依る心的修練より外にはない。但し、其心的修練は時間の問題を豫想して考ふ可き事ではないことを注意したい。

常識的には修練と云ふ言葉の裏に時間の觀念が豫想されるであらう。然し其靈的啓蒙の到来は所謂一念萬年であつて積算されて始めて行なはれる者ではないからである。

私は斷言したい。「信仰から神祕性を取つて仕舞つたら其信仰は成立しないであらう」と。神の愛と云ひ如來の慈悲と云ふ。一つとして神祕ならざるものはない。

然るに此神祕は理論上で本當に体得し得る者ではない。さうして一つの靈的啓蒙が必要である。即ち或る宗教経験を経ずしては本當に信仰の神祕を肯定する事が難しい。凡ての宗教が三昧を要求して居るもの此意味である。三昧は熱である。三昧の熱なくしては信仰の熱は起らない。信仰の熱なくしては共に信仰を語るに堪えない。熱は信仰の生命である。此故に信仰の神祕性は哲學に對しては無限の活力を與へ、教團に對しては熱情の恢復に備へ、人間に對しては人生の神聖に關して深い洞察力を與へ、藝術に對しては新鮮なる感の源泉を開く。

願くは一切の友よ。我等は信仰の神祕性を尊重して念佛の三昧にいそしまう。而して熱を起させう。而して人生に向つて大きな祈りを掛け合ふて行かう。(完)

心の扉を開け

中野善美

□明けましてお芽出度う御座います。さり分け今年は私も心の奥からあか／＼を開け放れたやうで、明るく元氣に充ちてゐます。何だが私自身の上にも本當に元旦が来たやうで、同時に全世界にも本當の元旦が、音で來たやうな感じがいたします。

□私には私の心の夜が明けて、本當にお正月が來ました。恰度燈籠の中に燈が点いたやうに、私らふものゝ中心に美しい燈が点いて來ました。そこで眞生の意氣がシン／＼と燃えてゐます。今迄は世間は明るくとも私だけは、燈の無い石燈籠のやうに暗かつたのです。それが明か／＼と元氣になって活動に出して來ました。何者にも此の明るさを傳へなきや懐かぬといふ確信が砾々と見えて來ました。

□明るくなるにはどうすればよいか、それは心の窓を開けなければいけないのです。心の扉を開けや、自然に奥の奥まで朝日が照り込んで來ます。「如來さま」の燈火が這入つて來ます。そこで心の上に燈がつかがす、するさ其燈火がだん／＼と燃え盛つて心の室内を明るくなつて來るのです。もう月を問へても内外照明、私らふものには有つても無きが如く、赫々として一大光明界あるのみです此の燈火は燈火を傳へて全世界是れ燈火の林立、燈の野させすには措きません。

燈火とは何か、それは「信」です。

□世には宗派の信仰が多い、曰く真宗の信仰、淨土宗の信仰、日蓮宗の信仰、龍宗の信仰等深山もろが、自己本心の燃焼としての信仰が勢い。又釋尊の信仰、キリストの信仰、道元、法然、鷲巣等祖師方の信仰を被つてゐる者は多いけれども自己自身が「信仰」にナツテゐる者は少い、私達は自己自身が此の燃え立つ「燈火」にならねばなりません、

□「信」とは「生きる」といふことです。本當に萬人がめい／＼の階で生きれるやうに「活かし」て居つて下さる如來さまの生命に感じて、本心から生き残へる時、萬人が樂しく其宗派、其國家、其人種の儘で、其宗教、其社會、其階級を生かすことが出来るのです生きたところには眞の「働き」があり、働きは「發展」を齎し、發展のある處「無限の向上」があります。我々は本當に此「眞生」を望んで已ません。此「宗教」を望んで止みません。

『宗教の体験と模倣』に就て

一〇

土屋觀道

一
宗教的体験の生活にはすべての生活が眞實であり、自由であります。従つてそれ等の生活には其の言ふところを爲すところ、すべてが何等の束縛もないのです。一切が自己の創造であり獨創であつて、そこには何等の模倣がありません。

之に反して体験なき生活はすべてが自由であります。従つてそこには一切が不自由であり、束縛であつて何等の獨創の見解もないのです。従つてそれ等の爲すところ、言ふところ、一として先人の模倣でないものはありません。而も前者の生活には常に前途が光明に輝き、永遠の生命と無限の向上とに生き活きて居ります。然に、後者の生活には一切が不本と不安と失望の中に、何の望みも樂しみもないのです。而も前者は自ら天地の大道に叶い、宇宙の心を中心として動くに反し、後者は自己の私利と私慾とに没入して自ら天地の公道に反して闇黒の生活に居るのであります。之恐くはまた、偉人と小人との生活の相違でもあります。

従つて多くの人々が偉人の生活を慕つて、之を模倣して之に等しからうとするものも無理からぬことであります。そしてまた、それが多くの人々の爲めに、一つの指道となり、目標ともなつて、之等の人々を惑化して行くことも事実であります。

二

乍然こゝに一つの注意すべきは其の模倣がいつまでも單なる模倣であつてはいけないと云ふことであります。何となれば模倣はやつぱりいつまでも單なる模倣に過ぎないので、眞實のものではないからであります。従つてそこには何等の生命もなく、反つて眞實の生命がそれによつて、蓋はれることさへあるからであります。殊に眞人の生活には單に之を外から模倣ばかりでは決して其の眞髓を得ることができないからであります。従つて、眞人の生活には一見之を外から見ましても徒に其の外形のみ模倣するやうに見えましても、其の眞、彼はその模倣を通じて、それの中に、自ら生くべき眞生の世界を自らに体験しようとしためで居るのであります。従つて、一体

模倣と言ふことは其の外見がいかに立派に見えましてもよくよく之を眺むれば決してそこには眞實の生命がないのであります。従て模倣はやつぱり單なる一つの模倣に過ぎぬのであります。従て模倣が本物に及ばないところも全くそこにあるのであります。従つて、本物はたゞそこのものがいかに粗末なものでありますても、そこにはそれだけの製作に対する創造の精神がともつてゐる爲めに、こんなに立派に見ゆる模造品よりも常に尊き一つの生命が流れてゐるのであります。そして、そこには、藝術が模倣を許さぬ点もありますが、殊に人類の宗教生活に於てそれが一層甚しいのであります。

三

たゞ、一の字一字でさへも、再び之と同じ字を書くと云ふことは嚴密な意味に於て、到底私共のでき得ないことです。それは私共の心と云ふものが常に變じて同じ状態にあり得ないからであります。従つて同じ一の字さへも私共は之を眞に模倣することはできぬのであります。そして其の模倣には眞に其の文字の生命を現はすことができないのであります。況んや、更にそれよりも大なる人類の生活に於てをやであります。殊に其の時代を異にし風俗を異にする現代に於て、古人の言行そのまゝを此の世に生活することができます。

否、それどころか、嚴密な意味に於ては、同じ時代に於てさへ、其の境遇を異にし、年齢を異にし、思想を異にするものがあるときには、之を一律にすると言ふことは到底なし得べきことではありません。況んや、百年も千年も隔てた昔のまゝの生活を今日の社會に行はうとすることに於ておやであります。

然に今日の所謂既成教團なるものを見るに、果してかうした誤りを今後くり返してゐるものはありませんまい、之こそ私共の大いに深く反省すべき点であります。尙それがかりでなく、たゞ偉人の生活でも、或る時代には多少の不完全な部分もあり、又彼等自らにも此の点に於ては常に改造を試みて止まぬものがあるべきであります。否、むしろ彼等偉人にも之等の改造反省のあることが即ち其の偉人たる所以でもありますのに、之等教團の人々にはこもすれば此の道理を知らずしていつしか先覺の言行を神聖視して、悉く之を完全として模倣しようとするのであります。従て、そこにはいつしか、祖師の言行に拘はれて、之に對する批判の眼もくらみ、そこには少しの反省も獨創も體験もないものとなつてしまふのであります。

四

乍然、かくいへばとて、模倣が全部悪いと言ふのでは

ありません。考へやうによつては一つの模倣は一つの眞實に到る方法として或る点までは其の効を奏することもあります。即ち習字の稽古の如き、或は軍隊の教練の如き、其の他或る点までは先人の教養、模倣によつて、之に近づくことのできるのはもとよりあります。こゝに最も注意すべきはそれは決して模倣そのものを尊ぶのではなくして、尊ろ之を避けて、其の中に含まれたる眞實の生命に近づかうとする点であります。従つて、私共が先人の教説に耳傾け、祖師の法語に従はうとすることは決して、之を模倣してそれに止まるのではないであります。否、むしろそれによつて、祖師と等しい体験の世界にまで自らを生かしめやうとするのが即ち私共の衷心の願いであります。然にそれを知らずして、たゞ徒に祖師の言行に捕はれて、一生を終ると云ふことは世に之ほざ恩なることはありません。

然に世には偉人は少く、凡人は多いであります。従つて、ともすれば、多くの場合、此の凡人が偉人の生活をまねやうとするのであります。而して自分の体験がない爲めか、それとも自分の体験が浅いため、自分の生活だけでは満足ができないので、そこに偉人の風光をまなびてここに偉人の言行を模倣して、自らの生活の向上を計らうとするのであります。

變化して行く傾きを以つてゐるのでありますから、百年千年と立つて従つて、其の當時の言葉といふものは已に古い言葉となり、全々後には普通の人には通じない言葉とさへなつて来る傾向をもつものでありますから、其の後に至つてはたゞ偉人の言葉でも、今日の人々の考へてゐるやうな意味ではなかつたと云ふものも多々あることであります。従て、そこには又常に注意して、先覺の言葉に捕はれず、いつも其の精神の根底に自らの体験を一致せしむべきであります。

然に己に前にも申したやうに、先覺必ずしも完全無欠の人でない限り、彼等の言行にも自ら完全でないものもあり、又その人の向上し發達して行く限り、そこには前に言つたこと、後に言つたことこれが一致せぬこともあります。又時代を去ること遠きに従つて、其の民心の變化や生活の組織も異つて来る爲めに、祖師先覺の當時の言葉や行いと同じ言葉や行いをすると云ふことは全くできぬ点も起つて來るのであります。

遂に於て、其の祖師を去ること遠きにかゝわらず、國民の生活や思想の變遷も顧みず、それを今日も尙、昔のまゝに行はうとするることは全く時代を解せない人々のするこゝと云はねばなりません。従て、この際若し此のこととを反省しないことならば、多くの民心は其の社會組織

此の意味からして、多くの人々はそこに偉人の言行を尊び、又それによつて、其の宗教をも知らうこし、体験もしやうとするのであります。又それの爲めに、先覺の教へに耳傾け、祖師の法語に其の信念を固めやうともするのであります。そしてまた、之が祖師先覺を中心として、一つの教團が成立する所以でもあります。中には此の外に弟子の個性や境遇の相違、その他色々の個人關係や經濟關係などが影響して、大きな教團が成立したり、分列したりすることも亦多いであります。そしてまた、偉人の言行を崇拜するのあまり、それが一つの概念化となり、其の概念が一つの信條となり、傳統となり、教權となつて、更に其の教團の上に力となつて其の人の自由さへ束縛するやうにもなるのであります。

五

然に亦、人の心と云ふものは其の言行を外から見ていける限り、祖師そのものの言行精髄を見ることができないために、ともすれば自分の勝手な都合のより説明に、其の意味を解釋しやうとする傾向さへあるものであります。従て、余ほどの深い反省を用心をしない限り、いつしか祖師の心と反した誤りにさへ自ら陥ることがないとは限りません。

そしてまた、人の言葉と云ふものがいつも徐々として

の變遷と共に從來の既成教團を離れて、更に新しき他の宗教に走つて行くことになります。そしてまた、そのできない宗教は之を奉る多くの民衆と共に時代の推移に従つてひびて行くに違ひありません。何者さうした宗教は時代と共に生きることができぬからであります。之主として、模倣宗教の末路であります。

六

乍然、かくいへばとて、私は徒に祖師の法語や、其の教團を悉く悪口するのではありません。それはたゞ、祖師の法語や教權の徒な模倣に対する弊害を云つたに過ぎぬものであります。必ずしも其の宗に於ける教權や祖師の言行を離したのではありません。而て、その弊害を破つて眞に生きるものは即ち体験の宗教であります。

然らば如何なる意味に於て、祖師の法語や一宗の教權が私共の生活に對して、眞實を有するものであります。それはたゞ偏へに祖師の思想信仰が常に時代を超越して、永遠の光に生きて一切を指導し、改造して行くところの体験の自覺にあるのであります。即ち言換れば祖師の言行、先覺の教へが常に萬古を貫く天地の大道より出で、社會を指導し、時代を改造して、一切を宇宙の生命に歸せしむるところにあるのであります。

乍然かかる教權や信條が果して此の世に存在するもの

でありますか。若しそれが此の世に存在するものでありますならばそれはたゞ、天地の大運によつて動く先覺の体験があるのみであつて、それは決して單なる先人の言行や教權の権威によつて得らる可きものではありません。從て、それはたゞ、自己の体験が祖師の体験と同じ体験となつたとき、即ちそれが師子相承の傳統となるのであつて、其の外に眞の傳統と云ふものはないのであります。祖師と自己とが一体となり、不二となつて、祖師の自覺と自分の自覺とが信仰に於て一となるのであります。從つて、そこには祖師の信仰がそのまま自分の信仰であつて、祖師の体験と自分の体験とが一となるのであります。言換れば祖師に流れた宇宙の大生命が自覺となつて私共の生命の上にも流れ来るのであります。

(三、三、三〇) 越後磐石にて(三、五、一八再校)
(三、一、一、一四、三松 東京)

◎ 吾朋便り

▲ 東京 堀清六様より

南無阿彌陀佛 御靈を拜承仕り難有御禮申上候。御教訓の御力に助かる事を得させて頂ける身の無量の愧びに親しみ居り申候。塵俗の世に泰然として意義ある生活を續けんご事念仕居り申候へ

其時々退転の惡魔に墮はれつゝある身の轉に情け無く感する事の屡々に心誠に凡夫の本性殘念千萬をこそ嘆き申候。

▲ 勝母町 郡鑑昇千様より

南無阿彌陀佛 暮中無我無中に何物が得んさて數年來なやみ來りした上人に見ゆじよりすじの明るき道を發見じ以て私をして向上き人生を眞に意義わらしめて真く準備の出來たるは二幅に上人の御靈きにて日夜其御心事を深く感謝致し居り念佛を勵みて其の日の生活に一步を進め申し候過日當地御來訪の節は生活の第一義としての生命の問題につき懸ろに指導を頼ひ常に上人の御語には私の要求する御語じを一步づき先を御語に預り其の御職員と云ひ御言葉と云ひ且つ御人格と云ひ眞に私より考へれば如來様の如く拜せられた幾十もの心の體から不平も上人の御すがたを拜すれば靈の朝日に合ひしが如く私の心より無くなり申すを覺へ申し候。今後も上人に依りて益々御指導を得る考なれば御見捨なく益々御憐みを加へられん事を切に懇願致申候。

上人の御識見並に御人格を知るもの、餘りに多からざるを靈ふるものなれ共、吾等道友は上人を通じて如來の道に生き動きせんものさ深く定め申し候終りに先日御法話深く感謝致申候。草々

▲ 大阪 藤村章様より

此程は遠方わざ／＼故健三の追悼會に御越しへ頂きました。身に餘るうれしさで御座いました。御上人様の尊き有難を御示し頂きました私共一家は元より親類の者共皆々涙にくれて感銘いたしました。到底草葉にも筆にも申盡せぬうれしさで御座いました。參

列の方で私共もどうぞ眞生同體に入れて頂きたい、普通寺方や御義理でお出下さる方々はあるが、このやうな心からなる追悼會は始めて拜見いたしまして、ちから強くうらやましき春になりますとの仰でしたから、こゝにお集りの皆様方はとても金錢やお義理では出来る事では御座いません。信仰に依てのみ得らるゝ賜で御座いますから、どうぞあがむも信仰に御入りなさいませと申しませんから、こゝにからいつも誇って頂きたいと申されました。

御上人様始め道友の方々様の御熱誠に動かされまじたものと私共もよろこんで居ります。深く／＼御禮申上ます。此上ながら何分宣歌御書き頂きますやう御願ひ申上ます。

▲ 東京 土屋觀道

口私は今東京の學寮の二階に居ります。此の四五日中、眞生の原稿書きに没投して、今漸くそれを終つた所であります。何となく大きな一つの仕事を終つたやうな氣がして静に獨り喜びに充されました。

口そこで今此の筆を走らせて、今までの一生を反省し、更にそれによつて来るべき前途に私の行動を意義わらしめやうを考へてゐる所です。乍然思へば今までの生活に於て、昭和三年の生活は私にさつては實に重大な年であります。二月になつて長男光道が生れた喜びが、八月になつて、暫く從來の傳道を中止して讀書を著述に取りかゝるやうになつたこと。其他十一月に至つて今上陛下の御即位式に遇つたこと。其他四月に長女の義智子が初めて小學校に昇るやうになつたのも私としては限りない喜びでもありました。

口尤も其の他なつかしい道友の他界に遇つたり、或はさゝいな道友の誤解から、此の上もない友を失つた悲しみもありますが、如來の大悲に墮むればそれも亦、反つて深き人生の體験であります。昨夜から一寸美智子がお腹を破して床にあります。其他は皆無事であります。

口それに近頃は何一つ不自由も感せずに、思ふさま獨り讀書にふけり、思索に入つて離ることも出来ますのはひそくに如來の加被力と皆さんのさだかき厚意によるところであります。

口又から十一月の中頃に大阪の健三氏の體調を崩し、久々に彼地の道友と語ることを得ましたのは之また近頃にない喜びでした。其の他序でたからこぶひので、大阪、岐阜、名古屋、佐屋、四日市、五味塚、津、大石の道友を訪ね、更に舉母、竹村、燒津、清水、沼津、を訪ねることできましたのは之また大きな獲物でした。多くの道友の勞々から喜んで頂いたことはもとよりでしたがそれにまして私のふさいた心を贈して頂いたことは數限りもありません。其の他多くの道友の各地も御訪ね下さいには山々でした。がそれでは反つてあまりに時間のひきつて、私の勉強にどうかと思つたので、中途からは急いで歸ることになりました。

口それについて思い出すことを今は今までのやうに、時間を定めて出るよりもかうじて不意打ちの訪問が時には先方の仕事とか合ふこともあるつて御迷惑のことをあるやうだが、それにもまして、其の喜びと効果が多いやうです。やつぱり本會にはいきが互に信仰もうごくなるやうだが、かうして御會して見るさ、やつぱり昔のものが直に信仰として現はるゝのが嬉しいことで

謹
奉
賀
新
年

全國眞生同盟
眞生同盟 東京支部
同 清水支部
同 名古屋支部
同 大阪支部
朝鮮支部
同 同
見相
附 光明眞生會
岐阜戶光光明眞生會
堀光光明眞生會
古屋光明眞生會
名古屋光明眞生會
津浦光明眞生會
高松光明眞生會
高商佛敎青年會
燒津母光明眞生會
舉母光明眞生會

就ては之からも勉強のつがれや、仕事の暇には時々皆様を自由に御訪ねすることありますから、その時はまだゆづくりと御相談を願います。そして、之からも又一層と共に眞剣に生きませう。

▲三、一二、一六

▲静岡市闘秀子様より

南無阿彌陀佛 大きな起きた事件、それに私事半月餘も病みまして今日やうやく床に上り致しました様な譯にて思はぬ御沙汰に打過ぎ何本御許して下させ。其後先生始め御一家様に益々御壯健にて御精進の程裏心より御嘗々申上げます。私事今度の病氣に依り益々如來の恩寵の偉大さを更に感し、今後は屢々努力を持ちて眞剣如來の直道へ精進するべく唯實行あるのみです。噫々如何に迷ひ進ふとも久遠の道は只一つ、先生、何卒よろしくお手ひたなる哀な子を御導き給はらん事を願ひ上ります。寒さに向ひますれば御一同様にやうやく御用心の程願ひ上ります。合掌

▲大阪豊田會三様より

南無阿彌陀佛 先日はお留守の處へお邪魔いたしまして何かを御厄介をかけまして相済みませんでした。丁度其日を弁慶上人の御祥月命日で神谷さんご外に三四の方々がお寄りあつまりになつてお勤めが今や終らうとするところでありました。久ぶりでお宅の三昧佛を拜する事が出来又神谷さんから体験の話についてお話を承りまして誠に難い感じがいたしました。どうか奥様へ宜頃くごお傳へを願ひます。時候も段々とお寒くなりますが皆様方もおからだをお大切に運ばせ様お祈り申上ます。合掌

謹て新年を賀し奉る

東京堤清六

小倉彦六
小要利吉進

神谷善之進
山谷口春沙都

安藤正福寺
安藤作藏道

正長眞福寺
正福寺

藤井伊助寺
藤井伊之助

中野久助寺
中野久助

永瀬繁之助
永瀬繁之

藤井庄太郎
藤井庄太郎

木生邦治
木生邦治

法月光二
法月光二

久我尾正浩
久我尾正浩

相馬忠平寺
相馬忠平寺

黒宮平八寺
黒宮平八寺

熊澤憲之
熊澤憲之

洞性寺
洞性寺

多壽寺
多壽寺

源江寺
源江寺

伊藤留吉寺
伊藤留吉寺

吉衛寺
吉衛寺

名古屋

鶴永伊
鶴永伊

井藤善
井藤善

野良助
野良助

生来
生来

安藤けい
渡部みさを

角田ささみ
中川五十子

磯田まささ
久子

鷺津本ぶ
本

川小飛那
飛那

松浦重三
重三

古賀精一
精一

片桐花照
花照

伊藤桑
桑

原省三
省三

大橋章
章

大橋行基
行基

圓基寺
圓基寺

須心寺
須心寺

高崎寺
高崎寺

高須寺
高須寺

高須寺
高須寺

貞松院
豊田會三

曾我尾昌治
曾我尾昌治

岩崎親雄
岩崎親雄

奥村善次郎
奥村善次郎

米田田代
米田田代

橋本忠政
橋本忠政

藤忠義
藤忠義

佐藤平一
佐藤平一

圓極寺
圓極寺

柳浦恒
柳浦恒

藤原原
藤原原

原原
原原

原原
原原

原原
原原

原原
原原

原原
原原

原原
原原

藤原原
藤原原

原原
原原

謹奉賀新年

眞生社編輯同人

土屋觀道	中野善美	神谷學周
中村辨康	大橋俊高	
山口常照	大野顯道	百々屋美和子
		タ治之助

謹
牛

清水實相寺の一月三昧會は、本年に限り寺の
都合で中止となりました。右御承知下さい。

◆廣告

「大寶曼荼羅」印施

今度静岡の栗生様が立派な大寶マンダラを印刷して下さいましたから、御入用の方は本社へ申込んで下さい。たくさん出来ておりますから御送り致します。

(大正十四年八月十三日) 第三種郵便物認可
昭和三年十二月廿七日印刷納本 昭和四年一月十二日發行 (毎月一回十二日發行) 第八卷 第二號

註文の意注	販売説本
●謹言希望者は代金を添へて 御申込下さい。	一部金十錢郵資共 半年金六十錢全 一年金一圓全
●謹代は總て前金御拂込の事 です。	
	振替口座東京四七二八番 真生社 昭和三年十二月廿七日印刷納本 昭和四年一月十二日發行 東京市芝區芝公園十四號地九番 獨創兼土屋觀道 發行人
	名古屋市西區隅田町二 印刷人 名古屋市東區鏡屋町二丁目 印刷所 鏡屋山田活版印刷所 電話東(4)二五・七五五 東京市芝區芝公園十四號地九番 發行所 真生社